九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ヴィシュヌ・プラーナ研究：第四章第一節和訳

奥田，真隆

https://doi.org/10.15017/2328657

出版情報：哲學年報. 36, pp.71-83, 1977-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

ヴィシュヌ・プラーナ研究

——第四章第一節和訳——

奥　田　真　隆

第四章は24節より成り，Purāna の所謂 Pañcalakṣaṇa のうち王朝の系譜 (vaṃśānucarita) を述べるものである．本章の一つの特徴は他の章が主として Śloka 体で記されているのに対し，本章が散文体で記されていることである．第1節以下には現在の Manvantara の始祖とされる第七代 Vaivasvata Manu の家系が神話・伝説を交えつつ述べられている．本稿は Viśṇu-purāṇa 研究の一過程として，この第1節の和訳研究を目的としたものである[1]．

マイトレーヤは言えり

1　尊者よ，徳行に従事せる人々によって為さるべきところのその日常と臨時とよりなる（祭儀）について，師は私に説明されました．

2　更に種姓の法と諸住期の法についても説明されました[2]．私は諸王の家系について聞きたく存じます．それについて私に語って下さい．師よ．

バラーシャラは言えり

3　マイトレーヤよ，この幾多の敬虔にして英雄的な王で彩られた梵天に始まる Manu の家系について汝は聞くべし．

更に又言えり

梵天を始めとする Manu の家系を日毎に憶念するその者の家系が断絶することは決してないであろう．

4　その故に一切の罪を滅す為に，彼のこの家系の次第につてい汝は聞くべし．マイトレーヤよ．それはかくの如きものである．一切の世界の初源にして

無始なる者，リグ・ヤジュル・サーマ・ヴェーダ等よりなり，尊者 Visun よりなる梵の現化，金胎である尊者梵天がブラフマーンダより先ず始めに生れた．

5　梵天の右手の親指から Prajāpati Dakṣa[3] が生まれた．そして Dakṣa には Aditi, Aditi には Vivasvat,[4] Vivasvat には Manu, Manu には Ikṣvāku, Nṛga, Dhṛṣṭa, Śaryāti, Nariṣyanta, Prāṃśu, Nābhāganediṣṭa, Karuṣa, Pṛṣadhra という名の息子達が生まれた.[5]

6　息子を望める Manu は Mitrāvaruṇa という祭式を執行した．

7　しかし，それがホートリ祭官の過失の為に損われて Ilā という名の娘が生まれた.[6]

8　そして彼女こそが Mitra 神と Varuṇa 神の恩恵によりて Sudyumna という名の Manu の息子となったのである．フイトレーヤよ．

しかし Īśvara (=Śiva) 神の怒に触れたため再び女となり，Soma 神の息子 Budha の隠棲処の近くをさまよっていた．

9　そして Budha は彼女に魅せられ，Purūravas という息子を産ませた．

10　そして彼が生まれた後，Sudyumna が男性となることを望んでいる非常に威神力ある最高の聖仙達は祭式よりなる者，リダ・ヤジュル・サーマ・アタルヴァ・ヴェーダよりなる者，一切よりなる者，精神よりなり，智よりなり，又何か或るものより成る者ではない者，食物よりなる者，Yajñapuruṣa (祭霊) を本性とする尊者を正しく祭った．

11　彼の恩恵によって Ilā は再び Sudyumna となった．

12　彼にも亦た Utkala, Gaya, Vinataという三人の息子が生まれた．しかし Sudyumna は以前女であったので領土の分与を得なかった．

13　しかし彼の父は Vasiṣṭha 仙の進言に従って Pratiṣṭhāna という名の町を Sudyumna に与えた．そしてそれを彼は Purūravas に与えた．

一方 Pṛṣadhra は師の牛を殺した故にシュードラとなった.[7]

14　Karūṣa からは Kārūṣa という非常に勇敢なクシャトリヤ達が生じた.[8]

15　一方 Nediṣṭa の息子 Nābhāga はヴァイシュヤとなった.[9]

16 彼から Bhalandana という息子が生まれた.[10] Bhalandana から著名な Vatsapri[11] が生まれた. Vatsapri からは Prāṃśu が生まれた. そして Prāṃśu から一人の息子 Prajāni[12] が生まれた. 次に彼から Khanitra,[13] 次いで彼から Kṣupa,[14] が生まれた. そして Kṣupa から非常に勇敢な Aviviṃśa[15] が生まれた. 彼からは Viviṃśa,[16] そして彼からは Khanīnetra,[17] 次に彼からは Ativibhūti,[18] Ativibhūti から非常に勇敢な Karandhama[19] という息子が生まれた. 彼からは又, Avikṣi,[20] Avikṣi からは非常に勇敢な Marutta という名の息子が生まれた.

17 彼については今日ですら次の二つの偈が吟じられている.[21]

Marutta が為したような祭式を, この地上で誰が為したであろうか. 彼の祭式用具の一切は光り輝く黄金造であった.

Indra はソーマ酒により, バラモン達は謝礼によりて満足した. Marut 達が給仕人であり, 神々が祭式の監視者であった.

18 輪転王 Marutta は Narisyanta[22] という名前の息子を得た. そして彼からは Dama,[23] Dama には Rājyavardhana[24] という息子が生まれた. Rājyavardhana からは Sudhṛti が生まれた. そして彼から Nara,[25] そして彼からは Kevala, Kevala から Bandhumat, Bandhumat から Vegavat, Vegavat から Budha, 彼から Tṛṇavindu,[26] そして彼には Ilivilaṇa という名の一人の娘が生まれた.

ところで Alambuṣā[28] という名の美しいアプサラスが Tṛṇavindu に恋した. 彼女に Viśālā という都城を建設した彼の息子 Viśāla が生まれた.[29]

Viśāla の息子は Hemacandra であった. そして彼からは Sucandra が生まれ, その息子は Dhūmrāśva[30] であった. そして彼にも Sṛñjaya が生まれた. Sṛñjaya から Sahadeva, 彼からは Kṛśāśva という名の息子が生まれた. Kṛśāśva から十の馬祠祭を行った Somadatta が生まれた. そして彼の息子は Janamejaya である. Janamejay からは Sumati[31] が生まれた. これらが Viśāla 一族の諸王である.

19 これに関しても偈が吟じられている.[32]

Tṛṇavindu の恩恵によって Viśāla 一族の一切の諸王は長寿にして偉大なる精神の持主であり, 勇敢にして深く法を重んずる者達であった.

20 (Manu の息子) Śaryāti に Sukanyā という名の娘が生まれ，Cyavana が彼女と結婚した.[33] Śaryāti の息子は Ānartta という名前で，法を重んずる者であった. Ānartta にも Revata[34] という名の息子が生まれたが，彼は Ānartta の領土を受継ぎ Kuśasthalī という都城に住んだ. Revata にも百人の兄弟の長子である Raivata Kakudmin という名の法を重んずる息子がいた. そして彼には Revatī という名の娘がいた. 彼は彼女を連れて，「この娘は誰に嫁がすべきか」ということを尊者蓮華生（＝梵天）に尋ねる為に梵天界に行った.

丁度その時，梵天の前で Hāhā と Hūhū という名の二人のガンダルヴァが Atitāna と名付けられる天上の歌を歌っていた.

21 そして三つの歌の調が転変して幾多のユガが転ずる間留っていたにもかかわらず，Raivata はそれを聞いていてたゞ一ムフールタの如くに思った.[35]

22 歌が終った時，尊者蓮華生を礼拝し，Raivata は娘に相応しい花婿について尋ねた.

その時かの尊者は『あなたが望んでいる花婿を言いなさい.』と言った.

彼は再び尊者を礼拝して自分の望に従って何人かの花婿（にしたい者）を述べた. そして『これらの者のうちで，誰であれあなたが望まれる者に私はこの娘を与えます.』と言った.

この時，尊者蓮華生は僅かに首を傾けて（考えて）微笑しながら言った.

23 『あなたが望んだところのそれらの者達の子孫や血筋を引く者ですら，今では地上に存在していない. 何となれば，汝がここでこの音楽を聞いているうちに幾多の四ユガが経過したのである. 今，地上では Manu の二十八番目の四ユガがほぼ過去ろうとしている. 実に Kali ユガが始まろうとしているのである. 汝は孤独な身の上になったのであるから，誰か別の者にこの宝石の如き娘を与えなさい.

24 汝の友人，大臣，妻，召使，親族，軍隊，財宝等一切も亦た滅んでしまっているのである.』

25 恐怖にうたれたかの王は再び尊者に礼拝して言った.『尊者よ，斯くの如き状況であるならば，私はこの娘を誰に与えるべきでしょうか』と.

その時，かの尊者，七界の師である蓮華生は少し首を傾け（考えて）合掌して言った

梵天は言えり

26 『不生者，遍在者，創造者，最高神にして，その始・中・終を私達は知らず，又その自相，最上の本性も，更にはその真髄をも知らないところの者.

27 不生，不滅，一切の姿をとり，無名，無色，永遠なる者にして，カラー・ムフールタ等よりなる時もその威神力の転変の因ではないところの者.

28 不朽者にして，その恩恵によりて私が有情の創造者となり，又怒によりて Rudra が壊滅者となり，その最高なるものによりて中間に於て Puruṣa が維持の因となれるところの者.

29 不生なる者にして，私の姿となって創造し，又維持に於てはかの Puruṣa の姿をとり，更に Rudra の姿をとることにより一切を食尽す．同様に Ananta の姿となり一切を支持するところの者.

30 Śakra（帝釈天）等の姿をとり世界を守護し，太陽・月の姿で闇を滅し，不滅なる者であり，火の性質をとりて成熟させ，大地の姿となって有情を養うところの者.

31 風の姿となって行動を起させ，又水と食物の姿となって世界を満足させ，又一切の維持を計りつつ虚空の姿となって一切の空間を与えるところの者.

32 自ら創造者にして創造され，守護者にして守護され，一切のものの破壊者にして破壊されるところのものと異ならざる不滅なる者であるところの者.

33 その内に世界があり，彼が世界であり，又この初源なる自在者としてこの世界に住しているところの者である，かの一切の存在の根源である Viṣṇu 神が自身の一部をもって地上に降臨している．王よ.

34 王よ，かって Kuśasthalī という Amarāvatī（帝釈天の都城）の如く美しい汝の都城は今日では Dvāraka となっている．そしてそこに Baladeve という名のかの Keśava（美しき髪を有す者＝Viṣṇu）の一部降臨が住んでいる.

35 王よ，汝はこの娘を，かの仮現せる人に妻として与えよ．かの夫は讃嘆

に値する人であり，汝のこの娘は宝石の如き女である．正に（二人の）結婚は似合わしいものである．』

パラーシャラは言えり

36　斯くの如く蓮華生に告げられて，かの王は地上に来りて全ての人々が背低く，生気乏しく，分別を勇気も乏しいのを知った．

37　そしてかの Kuśasthalī の都城に行き様子が変っているのを見て，かの非常に賢明なる王は自分の娘を水晶山（=Kailāsa）の如き胸を持てる，犂を旗印とせる者（=Baladeva）に与えた．

38　彼女が非常に背が高いのを見て，多羅樹を旗印とせる者（=Baladeva）は自分の犂の先で背を低くさせた．そしてこの為に彼女もすぐに他の婦人の如くになった．

39　Raivata 王の娘であるその Revatī を，かの犂を武器とせる者（=Baladeva）は規定に従って妻とした．そしてかの王は娘を与えて，意を決してHimālaya へ苦行の為に行った．

注

1)　本 purāṇa の所謂 critical edition は残念ながら未だ出版されていない．和訳にあたり，Text として Vishnupurāna with the Commentary of Śrīdharaswami, Pandit Jivānanda Vidyāsāgara ed., Calcutta, Saraswati Press, 1882 を使用し，Śrīśrīviṣṇupurāṇa, (text 及び Śrīmunilāl Gupta の Hindī 訳付) Gītāpress, Gorakhpur, saṃ 2024. 及び H.H. Wilson の英訳，The Vishnu Purāna; A System of Hindu Mythology and Tradition, Calcutta, 1981. M.N. Dutt の英訳，Prose English Translation of Vishnupuranam, Chowkhamba Sanskrit Studies, Vol. XC. Varanasi, 1972 を参考にした．他の資料に関しては Agni-p. (ASS. No.41), Bhāgavata-p. (M.E. Burnouf ed., Imprimerie Royale, 1847) Brahma-p. (ASS. No.28). Kūrma-p. (Rāmaśaṅkara Bhaṭṭācārya ed., Indological Bookhouse, 1967), Mārkaṇḍeya-p. (Bibliotheca Indica, 1862), Padma-p. (ASS. No.24), Harivaṃśa (BORI, Poona, 1969), Mahābhārata (BORI, Poona).又 W. Kirfel, Das Purāṇa Pancalaksaṇa, 1927 を利用したが，上記以外の purāṇa を記す場合はこれに依っている．

2)　これらは VP. III.8 以下に記されている．

3)　VP I.7.4 以下では Dakṣa は梵天の意より生ぜる九人の息子の一人とされるが．

I.15.73 以下では Pracetas 達の息子とされる．MBh. に於ても Dakṣa は梵天の意，或は右手親指より生ずとするもの (I.60.9ff; XII. 200. 17ff etc.) と Pracetas より生まれたとするもの (I.70. 1ff etc.) に大別されるが，両者共その娘の十三人が Marīci の息子 Kaśyapa に嫁し，Aditi より Indra. Viṣṇu 等 Āditya 達が生まれたとする点はほゞ共通している．Cf. Wilson, op. cit., p. 277. n.3; p. 95 n.5; p.43 n.2; E.W.Hopkins, Epic Mythology, Strassburg, 1915 p. 190. RV に於ては Dakṣa と Aditi の父娘関係は必ずしも明確ではない．dakṣa という単語を神名とするか形容詞と考えるかという問題はさておき，後の神話形成という立場から読む時 Dakṣa が Mitra, Varuna の父 (VII. 66.2; VIII. 25.5) Āditya 諸神の父 (VI. 50.2) 又 Āditya 諸神の一人 (I. 89.3) と見傚され得る記述がある．X.72. 4,5 では Aditi より Dakṣa は生じ．又 Aditi は Dakṣa の娘であるという循環発生が記され，続いて Aditi の後に神々が生じたと記される．Śatapatha Brāhmaṇa (II.4.42) には Dakṣa は Prajāpati であると記されている．Cf. J. Muir, JRAS, 1865 pp.72–75; A.A. Macdonell, Vedic Mythology, Strassburg, 1877. p.46.

4) 太陽神 (Sūrya) の別名．VP I. 15. 132 では Aditi と Kaśyapa の間に生まれた十二人の Āditya 諸神の一人とされ，III.2 には Vivasvat と妻である Viśvakarman の娘 Sañjñā からの Yama, Manu, Aśvin 双神の誕生に関する神話が記されている RV に於て Vivasvat は Aśvin 双神，Yama, Manu の父親とされている．しかし彼の妻は Tvaṣṭṛ の娘 Saranyū とされ，Aśvin 双神，Yama, Yamī の母ではあるが，Manu の母とはされていないようである．Cf. Macdonell, op. cit., pp.42–3; Hopkins, op. cit., pp.83–85; J. Muir, Original Sanskrit Texts, London, 1872 Vol.5 pp.227–8.

5) Manu の息子達の名前には異説がある．其準となるべき text が未出版である等不充分ではあるが一応の目安として簡単に表記する．次頁(数字は記載順を示す)．

この表からも娘か息子か問題のある Ilā を別にすれば Manu の息子は九人と考えられていたと言えよう．これらの purāṇa のうち十人と記すものは Bd., Mat= Pad. であるが後二者は Ila を息子に数えている．又 Bḍ. は nābhāgodiṣṭa とあり，十人と記されていなければ Nābhāgodiṣṭa ともとり得るものである．これは同様に Kūr. (nābhāgo hyariṣṭa) Li. (nābhāgo' riṣṭa) Mār. (1) (nābhago diṣṭa) (2) (nābhāgo riṣṭa) に於ても各々九人或は七人と記されていることから表の如くなるのであり，もしそうでなければどちらとも理解し得るものである．次に，多少の異同はあるが Ikṣvāku, Dhṛṣṭa (Dhṛṣṇu) Śaryāti, Nariṣyanta, Karūṣa, Pṛṣadhra の六人に関してはどの資料もほゞ一致している．問題は残り三人の名前であり，特に Nābhāganediṣṭa である．Wilson (op. cit., p.278 n.4) や Pargiter (Ancient Indian Historical Tradition, p.255 n.13) が指摘する如く RV (X.61, 18), Aitareya Br. (V. 14) に記される Nābhānediṣṭa が本来のものであるとすれば，Nābhāga との混乱により Nābhāganediṣṭa 或は Nābhāgāriṣṭa 更には Nābhāga と Ariṣṭa Diṣṭa 等の分

	Ikṣvāku	Nābhāga	Nṛga	Dhṛṣṭa	Śaryāti	Nariṣ-yanta	Prāṃśu	Nābhāganediṣṭa	karūṣa	Pṛṣadhra	Ilā
Brahmāṇḍa-p.	1	7	2	3	4	5	6	8 Diṣṭa	9	10	〃
Brahma-p.	1	2		3	4	5	6	7 Riṣṭa	8	9	〃
Vāyu-p.	1		2 Nahuṣa	3	4	5	6	7 Nābhāgo'riṣṭa	8	9	〃
Agni-p.	1	2		3	4	5	6	7 Nābhāgādyaṣṭa	8 Karuṣa	9	〃
Kūrma-p.	1	2·6		3	4	5		7 Ariṣṭa	8 Karuṣa	9	〃
Liṅga-p.	1	2 6 Nabhaga		3	4 Śarmmāti	5	(6 Dhimat)	7Ariṣṭa (Nabhagoriṣṭa)	8	9	〃
(1) Mārkaṇḍeya-p.	1	2. (5) Nābhaga		3 (Dhṛṣṭa-śarmāti)		4		6 Diṣṭa	7 Kurūṣa	8 Pruṣadhru	〃
(2) 〃	1	2. 5 Nābhaga		7		4		3 Ariṣṭa		6 Pūṣadhra	〃
Viṣṇu-p.	1		2	3	4	5	6	7	8 Karuṣa	9	〃
Bhāgavata-p.	1	9	2	5	3	7	10 Kavi	4 Diṣṭa	6 Karūṣaka	8	〃
Matsya= Padma-p.	2	10		5	8	6	3 Kuśanābha	4 Ariṣṭa	7	9	1 Ila
Harivaṃśa	1	2 Nabhāga		3 Dhṛṣṇu	4	5	6	7 Nābhānediṣṭa	8	9	〃
Mahābhārata	5	4		2 Dhṛṣṇu	7	3	1 Vena	10 Nābhāgāriṣṭa	6	9	8 Ilā

Bḍ. II. 602–3; Br. VII, 1–2; vā. LXXXV, 4–5; Ag. CCCLXXIII, 5–6; Ku. XX. 5–6; Li. LXV. 18–19 dhīmat を形容詞とするか個有名詞とするかで異なる. Mār. (1) LXXIX. 11–12. text はこうなっているが Dhṛṣṭa-Śaryāti-Nābhagadiṣṭa とさるべきであろう. (2) CXI, 4–5; Bhāg. IX.1.19–11; Pad. V.8.75–77; HV. IX. 1–2; MBh. I.70. 13–14.

離という過程が充分想定され得る．Vā., VP では類似を避け Nābhāga の替りに Nṛga. Nahuṣa を採用し，Bhāg., Bd. では Nābhāga と Nṛga の両者を採用したと思われる．又 Kavi, Kuśanābha, Vena は Prāṃśu と元来は同列のものであろう．VP Gītāpress 版は Nābhāga と Diṣṭa. Wilson の英訳は Nābhāga と Nediṣṭa と分け十人としている．しかし VP IV.1.15 では Nābhāga は Nediṣṭa (Diṣṭa) の息子とあり，(注釈家も同様に解している．nābhāganediṣṭaiti nābhāgasya pitā nediṣṭa ityarthaḥ) このことは VP が内容的には Nediṣṭa とさるべきものであることを示している．

6) Ilă に関しては Wilson も詳しい注をつけている (op. cit., p.278n.5) 又 J. Hertel の論文 (Die Geburt des Purūravas, WZKM, Vol. 25, 1911 pp.153–186) と A.B. Keith の批判がある (The Birth of Purūravas, JRAS, 1913 pp. 412–417). Pargiter も亦た言及している (AIHT, pp. 253–255). Hertel, Pargiter も述べる如く，この物語は大略して三型に分けられる，その第一の型は Pad., Mat. に依るものである．Ilă は Manu の息子誕生祈願祭により十人の息子達の長男として生まれ，王位に即けられる．彼は馬祠祭を行う為に馬を追って諸国を巡っていたが Śaravaṇa に入り馬共々女性化され Ilā となる．というのもこの森は Śiva 神と Pārvatī 女神により森に侵入する一切の男性を有す者は女性化するという呪がかけられていたからである．Soma 神の息子 Budha が Ilā と同棲し，Ilā は Purūravas を産む．Ilă の兄弟達は彼を捜して Śaravaṇa の近くで馬が牝馬となっているのを発見する．Vasiṣṭha 仙がその原因を説明し，Śiva, Pārvatī 両神を讃嘆するよう進言する．彼等はこれに従い，両神は Ikṣvāku の馬祠祭の果を自分達に与えれば Ilā は Kimpuruṣa となることを告げる．このようにして Ilā は一月毎に性の変る Kimpuruṣa となり Sudyumna と呼ばれるようになった．そして Sudyumna も三人の息子を得る．第二の型は Brahmāṇḍa-, Brahma-, Vāyu-p. に記される．Manu に九人の息子がいた．彼は息子を得る為に Mitra, Varuṇa 両神に対する祭式を行うが娘 Ilā が誕生する．Ilā はMitra, Varuna 両神を正当な父親と考えて両神の下へ行く．そこで Ilā は Sudyumna となり Manu の家系を繁栄さすであろうという恩恵を得て帰る途中，Budha と出会い Purūravas を産む．この後 Sudyumna として三人の息子を得る．Bḍ., Vā. はこの後 Sudyumna が狩に出て Umā の森で女となるが Śiva 神の恩恵により再び男になったことを記す．第三の型は VP, Mār., Bhāg. 等が記すものであり，第一型と第二型を合せたもので全体としては第二型に従い．Budha に会う前に Ilā は一度 Mitra, Varuṇa 両神の恩恵により Sudyumna となるが Śaravaṇa で再び女性化したとする．

この物語が Śatapatha-Br. (I.8.1 1–10), Taittirīya-s. (II.6.7. 3–4) に記される Manu の祭式に関する神話と，RV(X. 95) に記される Purūravas Aila と Urvaśī 伝説とを骨子とするのは明白である．そしてこれに Saudyumna (Sudyumna 家系の

者）と呼ばれ得る一族の恐らくは歴史的事実が付加統合されて成立したと考えられる．そしてこの底に全ての王朝の起源を Vaivasvata Manu に求めるという考え方がある (Cf. Pargiter, AIHT pp. 277–8). これらのことからこの物語の本来の形は Manu に娘 Ilā が生まれ，Budha により Purūravas を産み，次に Sudymna となって三人の息子を得るというものであったと思われる．領土の分割に於て娘 Ilā 誕生とするほとんどの purāṇa が，彼女が女であった為に相続しなかったが，結局は Pratisthāna を得てこれを Purūravas に与えたことを記している．これは Ilā が完全に神話の産物であることと，Pratisthāna (後の Prayāga-Allahabad Cf. Pargiter, AIHT p. 85) を中心にした Aila の歴史的事実に依ると思われる．Mat., Pad. では領土相続という難点を解決する一手段として最初から息子 Ila の誕生を述べたものではなかろうか．そしてこの為に Śaravaṇa 伝説が挿入され，これが元来の物語に影響を与えたと考えられる．

7) Ag. (CCLXXIII. 17), Br. (VII. 43) HV (IX. 4.37) は VP 同様事実のみを述べる．Bḍ. (LXI. 1), Vā. (LXXX VI. 1) は Cyavaṇa の牛とし，Vāyu-p. には殺して食べたとある．Mār. (CXII. 1–25) には狩に出て Vābhravya の父の牛を水牛と誤り射殺し，牛を守っていた Vābhravya に呪われて Śūdra になったとある．Bhāg (IX. 2.3–14) には Vasiṣṭha の牛番をしていて，夜中に虎と誤って殺し，為に呪われ Śūdra となったとある．(cf. Wilson, op. cit., p. 280 n.8) この Pṛṣadhra との関係は不明であるが RV の Vālakhilya 讃歌 IV に Manu Vaivasvata, Āyu 等と共に Pṛṣadhra が記され，同讃歌 VIII の作者と言われている．

8) Pargiter は Mār. の英訳 (Bibliotheca Indica, Calcutta, 1904 p.341) の註で Karūśa の国を論じて Kaśi と Vatsa の南．Cedi と Magadha の間の Rewa を中心とする地方であるとしている．

9) ほとんどの Purāṇa は彼の息子が Vaiśya となったことを記す．Mār. (CXIII—CXV) は Diṣṭa の息子 Nābhāga が Vaiśya となったがその息子 Bhanandana (Garuḍa-p. KSS No.165, 1964 Bhanandana. その他の purāṇa は Bhalandana) により回復されることを詳しく伝えている． Bhāg. (IX.2) も Diṣṭa の子 Nābhāga が Vaiśya となったとする． Ag. (CCLXXIII. 17) HV (IX.36) には Nābhāga の二人の Vaiśya の息子達がバラモンになったとある (nābhāgasya tu putrau dvau vaiśyau brāhmaṇatāṃgatau). Ag. VII. 42 では nābhāgariṣṭaputra dvau とある．Vā. にはこのことは記されない．

10) Pargiter は所謂 Vaiśāla 朝の諸王名に関する資料を記し，一応完全なものは Vā., VP, Gar., Bhāg であり．Li.は最初の四王，MBh.は誤って Ikṣvāku を入れるが Marutta まで，Bḍ. は Prajāni から Avīkṣit までを省き，Mār. は詳述するも Rājyavardhana このこまで，Rāmāyaṇa は Ikṣvāku の息子とする Viśāla から始めると述べている．(AIHTpp. 96–7). その記載箇所は次の通り．Bḍ. II. 61, 3–18; Vā. LXXX. 3–22;

Gar. CXXXVIII. 5–13; Bhāg. IX.2, 23–36; Mār. CXIII-CXXXIV CIX-CX; Rāmāyaṇa (The Vālmīki-Rāmāyaṇa, G. H. Bhatt ed. Oriental Institute, Baroda, 1960) I.46. 11–17; MBh. XIV. 4. 2–27. cf. Wilson, op. cit., p. 281 n.11.

11) Bḍ., Vā. はこれを欠く．Gar., Bhāg., VP Gītā 版は Vatsaprīti. Mār. は Vatsaprī とし，彼が Daitya の王 Kujṛmbha を殺し，Vidūratha 王の娘 Madāvatī を救出して妻にした物語が記される．

12) VP Gītā 版，Br. (VII. 26) では Prajāpati. Bhāg. は Pramati. MBh. は Prajāti で Manu の息子とし，不正確．Mār. は Prajāti.

13) MBh. はこれを欠く．Mār. (CXVII.9–CXVIII. 21) では彼は五人兄弟の長男として生まれる．これによると彼の兄弟 Śauri の大臣である Viśvavedin は Śauri を説得し，外の兄弟の祭官達と計って Khanitra を殺そうとするが，反対に彼等自身が滅んでしまう．これを知って Khanitra は深く悲しみ Kṣupa に王位を譲る．

14) VP Gītā 版，Bhāg. では Cākṣuṣa. Wilson の訳は Cākṣupa.

15) VP Gītā 版，Gar., MBh. は Viṃśa. Wilson の訳は Viviṃśati. Mār. は Vīra.

16) Bhāg. は Rambha.

17) VP Gītā 版，Vā. は Khaninetra. Mar. (CXX) に依ると彼は息子を得る祭式に使う為に鹿狩に出たところ，子供のある鹿と無い鹿とが自分達を殺して祭式に使うよう申し出る．しかし結局王は生物を殺す祭式を止め，Indra 神に祈願し息子 Balāśva =Karandhama を得る．MBh. (XIV. 4.7–9) に依れば彼は十五人兄弟の長男であったが，兄弟を圧迫し，人望も無く，王座を息子 Suvarcasに譲らされた．

18) この名前は疑わしい．Wilson の訳もこれを欠く．Gar. は Vibhūti.

19) Vā. は Kharandhama. Mār. (CXXI) に依ると彼の元の名前は Balāśva であった．彼は諸王により彼の町が包囲された時，両手に息を吹きかけて軍隊を出し，敵を討滅ぼした．MBh. (XIV. 4. 9–16) では Suvarcas=Karandhama とあり，同様の物語を記している．Karandhama は Karaṃ √dhmā に由来するとある．(Mār. では dhutayoḥ karayor に由来するとするが MBh. pradadhmau sa karaṃ の方が明快である．cf. Pargiter tr., Mārkandeya-purāna, p. 625 note*).

20) Avikṣi と Avikṣit の両者がある．Mār. では Avīkṣi, Avīkṣit, Avīkṣita とされ，その名前は彼が生まれた時，Karandhama が吉祥なる星々が見守る (avaikṣita) と言ったことに由来するとされる．彼は svayamvara で Vaidiśa 王 Viśāla の娘 Vaiśālinī を力ずくで奪う．この為，外の王や王子達に攻撃を受け遂に捕えられるが，父に救出される．Vaiśālinī は彼との結婚を願うが，Avikṣit は捕虜となったことを恥じ誰とも結婚しないと宣言する．Vaiśālinī は家を出て森で死のうとするが，神々に止められる．一方 Avikṣit は父母により説得され結婚することを承諾する．そして狩に出て Dānava に襲われている Vaiśālinī を救け，結婚する．父は王位を譲ろうとするが彼は受けず，息子 Marutta を王位につける．

21) Vā. は Manutta. MBh. (XIV. 4–10) は Marutta の祭式について詳しく記す. Vaiśāla 朝の祭官である Aṅgiras には Bṛhaspati と Saṃvarta という二人の息子がいて互に争っていた. Indra 神は Marutta の勢力を恐れ, Bṛhaspati に Marutta の祭式で祭官とならぬよう告げる. そこで Bṛhaspati は Marutta に祭式の執行を依頼された時, 自分は Indra 神の祭官であり, 人間である Marutta の祭式は出来ないと拒絶する. Marutta は Nārada 仙の助言により Saṃvarta に頼むことに成功する. 彼は Saṃvarta の指示に従い, 祭式用具を全て黄金で作る等, 素晴しい準備をした. Bṛhaspati はこれを知り, Saṃvarta が栄えることを妬み, Indra 神にこれを阻止するよう頼む. Indra 神は Agni 等を送り, Bṛhaspati を祭官にするよう強要するが, Marutta は Bṛhaspati の言葉を楯に取って拒絶する. そこで Indra 神自身が神々と共に出向いてくるが, Saṃvrata によって宥められ, 却って神々共々祭式に参加協力する.

この二偈のうち, 「Indra は… (amādyad indraḥ somena dakṣinābhir dvijātayaḥ)」という一節は, MBh. I. 112. 9; III. 86. 6; III. 121.7; XII. 29.31 にある. 又 Śat. Br. XIII. 5. 4.18 には amādyad indraḥ somenâtṛpyan brāhmaṇā dhanair と記される. 只, いづれも Marutta による祭式ではない. 次に, 「Marut 達が…(marutaḥ pariveṣṭāraḥ sadasyāśca divaukasaḥ)」という一節と全く同じではないが, MBh. (XII. 29.19) には āviksitasya vai satre viśvedevāḥ sabhāsadaḥ/marutaḥ pariveṣṭāraḥ sādhyāścâsan mahātmanaḥ//Śat. Br. (XIII. 5.4.6) に marutaḥ pariveṣṭāro marut-tasyâvasangṛhe āvikṣitasyâgniḥ kṣattā viśvedevāḥ sabhāsadaḥ とある.

22) Bhāg. はこれを欠くが IX. 2. 19–22 では Manu の息子である Nariṣyanta の系譜を記す. cf. Pargiter, AIHT. p.256.

23) Br. は Yama. Gar. は Tama. Mār. (CXXXIII-CXXXVI) に依れば, 彼は svayaṃvara で Daśārṇa の王の娘 Sumanā に夫と選ばれる. しかし三人の王子が彼女をさらうが, 彼は彼等を打破って取り返す. Nariṣyanta は王位を Dama に譲り, 森に隠退するが, 先の王子の一人 Vapuśmat に殺される. Dama は Vapuśmat を殺し, その肉で団子を作り霊前に供え, 羅刹種のバラモンに食べさせた.

24) Bḍ., Vā. では Rāṣṭravardhana. Mār. (CIX-CX) には太陽神崇拝を語る所で, 彼についての長い物語を記す. 彼は妻に白髪があると言われ, 森に隠退する決意を固める. 大臣や祭官達は引き止めるが, 王の心を翻すことは出来なかった. しかし Gandharva の忠告で, 人々は Kāmarūpa の森へ行き太陽神を崇拝し, その恩恵により Rājyavardhana は無病長寿を恵まれる. しかし王は愛する妻, 友人達の死後も生き続ける苦痛を思うと喜べなかった. そこで彼は妻と共に同じ森へ行き, 激しい苦行により太陽神を満足させ, 妻や大臣を始め全ての人々も無病長寿となるという恩恵を得る.

25) Bḍ., Vā. はこれを欠く.

26) Bḍ., Vā. は彼が Tretayuga 第三月に王となったと記す.

27) VP Gītā 版, Wilson の訳, Gar. は Ilavilā. Bḍ., Bhāg. は Iḍaviḍā. Vā は Draviḍā. Bḍ., Vā. は彼女を Viśravas の母とし, Bhāg. は妻とし, その息子を Dhananda とする. Cf. Wilson, op. cit., p.283 n.24; Pargiter, AIHT p. 241.

28) Bḍ., Vā. はこれを欠く.

29) Bhāg. は註27に記した Dhananda の息子とする. Viśāla は Vaiśālī と考えられている. Cf. Wilson, op. cit., p.283 n.5; V.A. Smith, Vaiśāli, JRAS, 1902, pp.267–288.

30) Bhāg. Burnouf の text では次の様に記す. hemacandraḥ sutas tasya dhūmrākṣas tasya câtmajaḥ/tat putrāt saṃyamādāsīt kṛśāśvaḥ sahadevajaḥ //IX. 2. 34//. これに依れば「Hemacandra の息子は Dhūmrākṣa, 彼の息子は Kṛśāśva と Devaja」と思われる. Cf. Wilson, op.cit., p. 283 n. 27.

31) Bḍ., Vā. は Pramati. Bhāg. は Janamejaya と Sumati の順が反対になっている.

32) Rām. (I.46. 18) に Tṛṇavindu を Ikṣvāku に変えてほゞ同じ偈がある.

33) Sukanyā と Cyavana の結婚の物語は有名であり, Bhāg. (IX.3), MBh. (III.122–125) に詳しく記さんているが, これは RV (I. 116.10) に始まり, Śat. Br. (IV. 1. 5ff) に受継がれているものである. MBh. に依ると, Bhṛgu の息子 Cyavana 仙は苦行していて蟻塚に埋もれてしまう. Śaryāti の娘 Sukanyā は蟻塚の中で光る眼を見て, 不思議に思い, 人とは思わず先の尖ったもので突く. Cyauana は怒って Śaryāti の軍隊の小便を出なくして苦しめる. Śaryāti は原因を知り, 娘を Cyavana に与えることで彼を宥める (III. 122). さて Aśvin 双神が彼女が沐浴している所を見て, 年老いて醜い Cyavana を捨て自分達を夫にするよう誘惑する. 双神と Cyavana は池に入り, 全く同じ若く美しい姿で出てくるが, Sukanyā は自分の夫を見分けることが出来る. Cyavana は若さと美しさを得た礼に彼等が Soma 祭に参加出来るようにすることを約束する (III. 123). Śaryāti の祭式を行なった時, Cyavana は Soma を Aśvin に献じようとするが, Indra は Aśvin 双神が医術者に過ぎず, 神々と共に Soma 祭に参加する資格は無いと拒み, Cyavana を滅ぼそうとするが, Cyavana は悪魔を出現させ遂に Indra に Aśvin 双神が Soma 祭に参加することを承認させる (III. 124–125). Cf. J. Muir, Original Sanskrit Text, 1872, Vol.5 pp. 250–254.

34) ほとんどの purāṇa は Reva であるが Br. (VII.28) は Raiva とする. Li., Mat., Pad. は Reva の前に Rocamāna を入れる. Cf. Wilson, op. cit., p.284 n.30.

35) VP I.3 に記される, 時の計算をあてはめると梵天界での 1 muhūrta は人間にとっては 66.6̇ mahāyuga に相当する.